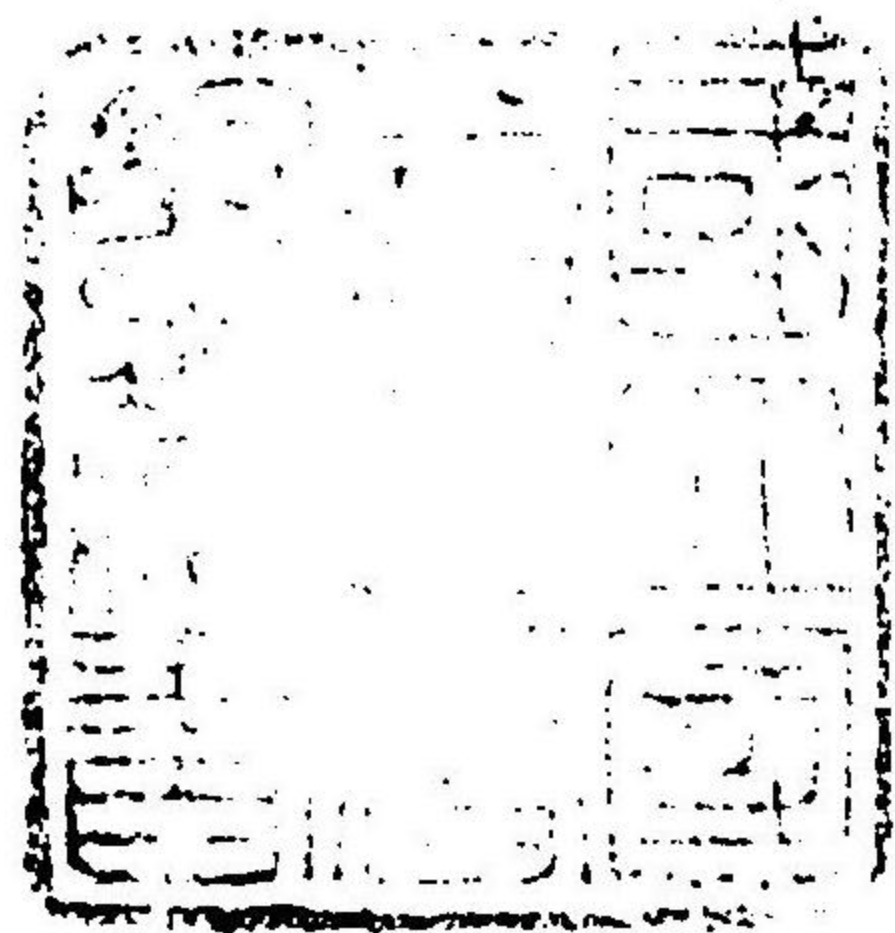


奥羽觀蹟聞老志

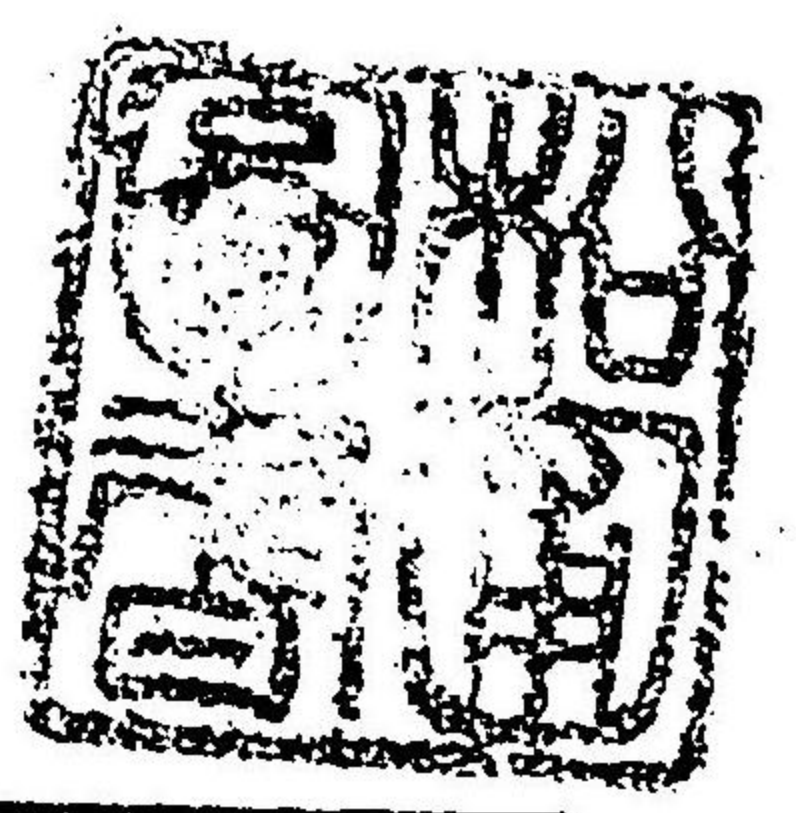
三

291.2

Sa.5310



348437



奥羽觀迹聞老志卷之三

庸貢土產類上

仙臺 佐久間義和著

夫奥州者大國也往古以庸貢土產而獻之
 天子出史錄傳記者往々有之或又其實見
 于歐書等者亦多爾後王道衰禮樂征伐出于
 將軍來朝貢亦止焉其間雖不盡與于此稱之
 佗邦賞之通國者亦有之仍輯之以便觀覽云
 日本風土記曰宮城郡貢杉樟檜檉黃檉茯苓松狐
 狸猿兔鱒鮭鱒鮎等亦出怪石奇茶桑麻白綿紙

墨等

按梓黃檀茯苓奇菜之外今皆所產也但製墨之事不聞古制

又曰躑躅岡在府之西非今治府乃指出紅躑躅官以之摺衣號都都茲摺

按今無此摺矣讀此更知雅物之生于斯地今不傳最可惜猶信夫之於文字摺宮城之於萩花摺也

又曰名取郡貢杉柏檜桐栗梨梅紅花熊鹿猪狐之革猿兔之膽準鷹牧馬鸛鶴雁鷓鴣鴿鷺鱒鮭

鮎及海鮮等

按讀此三條審往古之朝貢且知往時此郡中有牧馬今無知其處者實可惜也

又名取川貢鱒鮭鯉等又出怪石木材奉官家

按今此川不出鯉且木材乃今稱之沈木焉是乃和歌所詠埋木是也土人取之或用之器物或燒而用香爐炷香尤奇也世人賞之埋木灰或稱之流木見從三位氏久之詠矣仍舉古歌及乎此者以證之云

古今戀三

よ多人志少

名と里川せゝの埋木あらはれはれはれにせむ
せの逢見そえけむ

新古今戀一

攝政大政大臣

なけの志よいまはぬを志名取川瀬々の埋
木くちさてぬとも

新後撰春下

定家朝臣

名取川春の日數はあらはれて花にそ志けむ
瀬々の埋木

菅原伊長朝臣

憂身よみ沈はてたる名とり川又埋木れりす

やそふらん

續古今戀

源時清

とちのくみありてみ川の埋木のいつあらは
れてうれ名とりけん

源三位爲繼

名とり川捲りにあるてふ埋木も淵おそとつ
む五月雨のあろ

津守國明女

埋木のいさやくちかん名とり川あらはれぬ
しき瀬々は過よれ

續千載

少將内侍

いゝよゝて朽よはてん名とり川瀬々此埋
木あふは純ぬ間よ

平 政長

うゑとても何ふよ志の巻はなとり川よ志あ
ふそれよせゝの埋木

續後拾遺

從三位氏久

名取川あふせよよとむ流木のよる如た志
了ぬるよそてりな

新千載戀

贈從三位爲子

あふは純了くやゑ此物はなとり川たへたる
中乃瀬よれうもき木

續後拾遺雜

藤原真忠

あせり川いゝなる瀬にゝあらはきく身乃埋
木の人にあらまむ

新拾遺

前大納言爲定

あとり川瀬よ乃埋木字きあつみ何ふはきく
ゆをさあたきのおろ

名所百首

定家

名せり川心あくたけ字もき木のおせはりえ

くぬ袖のさうらと

同

定隆

あとり河心乃とはる埋木れさたゆく浪のい
かゝことたへん

かたりなを忍て人にさるせさりける人
お

家集

定家

せたりわひぬいまはたれなとあせり川顯れと
てねせとの埋木

返さ

名取河ゆゑ了れ浪にあと純了澄をそ見へむ
瀬々の埋木

九月十三夜水無瀬殿歌合河邊戀

あとり川わたれはつゑ志朽とつる袖にぬめ
るれ瀬々れ埋木

入道攝政歌合

同

家隆

よとさゑはあふ夢にみへよあとり川はけの
まをさるせとの埋木

河邊に見螢といふ事を

夫木集

式部卿為相卿

埋木乃心も志ふけなせり河さもあらはれ了
飛螢りな

仙洞三首河邊杜鵑 少將内侍

時鳥をれりさ月のなとり河はや埋木のあふ
はれてあけ

文永二年歌合 前大納言資季卿

冬もりあはあよひは秋の名とり河月ふや見
へむ瀬々乃埋木

弘安元年百首 後九條内大臣

埋木もえは志紅葉のなとり河あふはれてゆ
冬乃あは志あ

從二位範定卿

名取川底の埋木あははるな紅葉はうへの色
に出ゆとも

圓觀法師

みちの冬のをうけあとり川流を來くあつみや
はてん瀬々の埋木

四十二代文武帝大寶二年夏四月壬子令筑紫七
國及越後國簡點采女兵衛貢之但陸奥勿貢

四十三代元明帝和銅六年夏五月癸酉令陸奧貢
白石英雲母石硫黃

按白石英俗所謂水晶者是也封內處々出之
刈田郡出紫石英其色紫艷最可愛硫黃亦多
出焉但未聞出雲母也

四十四代元正帝靈龜元年冬十月丁丑陸奧蝦夷
須賀君古麻比留等言先祖以來貢獻昆布常採
此地香阿村年時不闕今國府郭下相去道遠往
還累旬甚辛苦請於閑村便建郡家同於百姓共
率親族永不闕貢並許之今以出于松前而爲上品

四十五代聖武帝天平二十一年二月丁巳陸奧國
始貢黃金於是奉幣以告畿內七道諸社事詳杜
鹿郡金華山下

大明一統志日本部曰土產金東奧州出細絹花布
硯等亦有之

四十九代光仁帝寶龜十年九月癸巳勅陸奧出羽
等國用常陸調純相模庸綿陸奧稅布充渤海鐵
利等祿

東史曰奧州磐井郡毛越寺本尊丈六藥師乃基衡
乞支度於佛工雲慶雲慶註出上中下之三品基

衡令領掌中品運功于雲慶所謂金百兩鷲羽百
尻徑七間半水豹皮六十餘枚安達絹千匹希婦
細布二千端襪部駿馬五十匹白布三千端信夫
毛地摺千端等也又稱別祿生美絹積船三艘送
之

按安達絹希婦細布信夫毛地摺此時猶足備
寄贈矣然考袖中抄顯昭時毛地摺世上已少
見之者也如今基衡所贈如此其多何哉且細
布亦其所傳說未分明其義亦可疑

八十二代後鳥羽帝文治二年夏四月廿四日陸奧

守秀衡入道請文參着貢馬貢金等尤先可沙汰
進錄倉可令傳進京都由載之云々是去比被下
御書御館者與六郡主東海道摠官也尤可成魚
水思也但隔行程無所欲通信又如貢馬貢金者
爲國土貢印爭不管領哉自當年早予可傳進且
所守勅定之趣也者上所與御館云々

五月十日陸奧守秀衡入道有送進貢馬三匹竝
中持三棹等其馬一兩日飼勞則相副件使者可
進上京師之由被仰左衛門尉朝家云々
冬十月朔陸奧國今年貢金四百五十兩秀衡入

道送_レ獻_レ之_二品_一可_レ令_レ傳_レ進_レ之_二故_一也

同四年夏六月十一日泰衡進_レ貢_レ駿馬黃金桑麻等_ヲ
于_二京師_一昨日_三至_二大磯驛_一可_レ召_レ留_レ歟_レ之_二由_一義澄申_レ之_二
泰衡同意與州之間二品依_レ令_三憤_レ申_レ給_レ度_々被_レ尋_レ
下_レ去月又被_レ遣_レ官使_ヲ畢就_レ之_二言_一上歟然而其身雖_レ
與_レ反逆有限公物難_レ抑留_レ之_二由_一被_レ仲出_レ云々共東史
武藏國住人つゝ_レの平太經家は高名_レ此馬乘馬
飼也けり平家此良等なりけ_レ此は鎌倉右大將
先志とりて景時_一預_レぬ_レにけり其時陸奥よ
り勢大ふ志てぬけ_レ惡馬を奉りたりけるを

いりおも乗者ありけり聞へある馬乗とも
に面々に_レ比_レせぬ_レけ_レ此とも一人もたまる者
あかりけり幕下思煩ひ了るにて_レ此馬_一
乗者あま_レくやま_レむ事口惜き事也い_レろ_レす_レ
きと景時に_レい_レひ合_レけ_レ此は東八ヶ國に今は心
あ_レく_レ此者候は_レ但_レ囚人經家_一了候と申け_レ
はさらはめせと_レ即召出さ_レぬ_レ白_レ水干_レ
葛の袴を_レ着_レたりける幕下_レろ_レる惡馬有_レつ
ろ_レあ_レまつり_レろ_レやとの給_レふ_レけ_レは經家か志
あ_レまり了馬は必_レそ人_レに_レ比_レぬ_レへ_レ此答_レにて候

へはいゝよたけれも人に隨はぬ事や候へれ
と申げれは幕下入興捲れけりさはは川
ふまつれとてすまはま馬を引出されはけり
大いに高く志てあぬりとははつゝそ糸まは
りけり經家水干の袖をとり了袴の捲はさ
くそさとえ何字とりけ志て庭より立たる
けしれ先ゆく志くそ見へにけるらもて存知
りぬりけるにやをつはを捲持捲たりける捲
のく川はせりけて志繩とぬ捲たりけるを
少も事とも捲はねは志りけるそ志志繩ふ

すかりてさそりよ捲て乘にけるやめてまり
あかりて出にけるそ志志は志らせて打とめ
てのとくと何ゆませて幕下の前に向て立
たりける見る者目を驚かさそせいふ事を志
能のらせて今はさやうめてこ捲あら先との
さまさせける時れりぬお不いふ感志給て勤
當免されて厩別當にかされぬりゝの經家
か馬飼にるは夜半はかりにおきて何にらあ
りけん志る物を一ゝらにはあり手つり
らもて來りて必飼にりすへてよるくは

うり物をまはせて夜あくればははとと鬻ゆは
せて馬の前には草一把もをかひればくま
はりせて控ありたる幕下富士川會澤の狩に
出られば時は經家は馬七八疋ふ鞍置て手
綱結て人もつれに打放ちて侍れば經家り
馬の志りに隨て行とりさて狩庭にて馬のつ
かればる折おはえお隨て控まいらせたる
りように傳へたる者お經家いふりひかえ
入海お死よればは知ものお口惜死事也
著聞集馬藝部

袖中抄顯昭云とふの細布とはとちのれをふ出
るせは死布也せはと純は狹布と書てやう
て音にとふとよみて訓に布をぬのとよむ也
其音訓を合てとふの細布といふ也
綺語抄にはとちのちのちのちつ死物とてはと
りせをを志ていや志き布ありといへり
無名抄云此とふの細布と云はみちのおまに
烏の毛志て織たる布也多りたぬ物にて織る
布おまをはとはりもせはをむろも短りたれ
は上よ死る事はあきて小袖あとのやうに下

にきる也されは背計をりてあてむひまては
かゝぬよをよむ也

奥義抄云々ふの細布とは又ちの國のふの
郡より出くる布ありとさはりせは死布なれ
はむねあはれとはいふ也

私に云鳥の毛をて織む事さもや侍らむ
物に書て侍れは件の布は兎の毛を物のふと
にいきて尻に付そ死穴をあけてそきより芋
を通ちて引出せはそきよりの毛のほれて出
るとねりつらて織布也うるさをこつたは志

死物なれはせはを母そ死也さてよは例の芋
をちて其毛をはぬきにするよと侍りき武則
真人歌云

志川の光あつはさぬのさぬきにう川兎
の毛の布の程の狭さよ

又々ふの細布とは又ちのさのふの郡より
出くる布を奥義抄に侍る是古義也又ちの國
の郡をもの中あふふと云郡かるとふの管薦
とふの郡あ有こもをいへりそれもさる郡か
と志のふもちまりのあそ信夫の郡は慥あ侍

るりゝる義いはんは郡とはいはてゝ夷
の住家おはふと云所ありとせいふへき
顯昭の云信夫もちすりとはいみちれくの信夫郡
と云所にもちすりとてみされるをりすとす
る也考るに伊勢物語云おとこのきりり
狩衣のすせとせりて歌を書てやるそのたと
と信夫摺のりり衣をおむれりりり
無名抄云志のふもちせりせはみちのをに信
夫の郡お亂れするすりをおのとすりりりせ
せいせはとへする所の名とやめてそのせり

の名とをつゝてよめる也遍昭寺の御簾の
へりにせすら純てあり志と四五寸はりり切
せりて故師大納言の清和院の御簾のへりよ
まねはれく有志は世人見て興せ志此頃は
皆やりとら純て失よるるおや
童蒙抄云文字摺とは陸奥國の信夫の郡にす
り出せる也字ちりりへて亂れるは志をすれ
り遍昭寺のあ志と純のへりおてあり私云
先年よ民部卿成範卿左京大夫脩範卿あとい
誘は純て西山の寺めをり志侍りしお遍昭寺

に詣て侍りおはすの母屋御簾は足巻りの
けるを申物にて忍みすりのへり皆失て侍り
さりおにをのくゝとすを折つゝこぼもてう
へり侍りおら又中納言大將兼長冬の春日祭
の使にくゝり給ひ供に人ゝ色ゝの小花を折
りてきら先代はる中より前馬介範綱り子清綱
か信夫摺のりり衣を着ゝりはるり心有て見
へは純は故左京兆次日範綱りもとへ
代のふ見お忍ふれ見ゝ純誰からん心の海
とせかきりおら純て

顯昭云とふのするこもとは編と十とてあみと
る也まうこもとは管にてあみとるこも也管
笠管篋管枕すうわおとたといふことお薦
はれはや字は菰蔕あてあみとれは本の名に
隨てこもとはいへり藁に編とるをわおこ
もといふ管より編とるをは管薦といふ也十
符あおん事はむろりおん料也
綺語抄にはとふとは十符あみとるをいふと
いへり又とちの國といふをるは此むろきこ
もの奥州にあるおえり是は人をおもふ心に

て七ふには君をねさせ三ふに我ねむとよ
先りそれと童蒙抄綺語抄あせにみちの國に
とふの郡よりとふ編とるこもの出をるよ
いへる心志れを奥州の郡の内さまとくと
ふの郡あり又とふ所みるはさて待りなん
とふの郡より十符あみとるこものいと
ふ事けに死こへた又とふの郡と云所お生ふ
るこもの十節有をいへるもいはれをこもの
節いゝと十節あるへたとと十符あみとるこ
そいはれとりまると十節有管とこそいふへ

き薦といふはいはきす此とふの郡れとふ
先るこもの義極て手は、也

又十符何まん事は外にも有りあんといふ難
はいはきそ何事もやす死事かれとも國くに
好むことりはりたれは陸奥國にとふのそり
こもやこれむよこそ又あかりちにこのます
ともさや字に編いゝとる歌あれはやりてそ
れと見ちのまのとふのすゆこもとよむ也

按國中素無十符郡者也自古所稱十符池者
今宮城郡今市河北有古館址稱之多賀國府

是乃往昔遷多賀城于茲者也其山下西南民舍屋後有小池是所謂十符池也池中生菅草今猶存焉相傳往時貢薦出于此地又古館東北村落謂之利府利字倭俗別訓謂之登若上野利根川訓之而謂登瀛川是讀利而訓登字之證也然則十與利元訓相通譯之登音亦有之據此說則鄉俗誤而訓里字者亦未可知焉於是却知今里婦之音乃誤古之十符者乎固雖非郡縣名其鄉黨之地亦曠遠而佻誤稱之郡縣來歟故舊記數引稱郡縣者亦不審矣然

則古之十符實今之利符也後人詳此焉但惜古貢薦不傳今已無所考之况製作之法亦絕無知之者也自是考之則十符池亦其地近乎利符又其邊有菅谷村者然則其名之所據亦皆出于此義乎

顯昭云菘花は催馬樂の更衣の歌心也衣のへせんやと君とちや春かたぬれと野原篠原菘の花摺やと君達や綺語抄云菘の花とて衣をすも也

或曰是乃宮城野古昔以紫菘摺之絹而爲紋

理供庸貢者也今考之古歌以其意而詠諸宮
城野者尤多據此說則或然乎故舉古人之詠
吟與乎此者而以證之識者考之

續千載雜牀

前大納言爲氏

露からら色もりはらすそりころも千種の花
のみやき野の原

玉吟

家隆

宮木の、露わとゆとはわり衣忍ふもちすり
萩か花すり

光明峯寺入道攝政家歌合野邊早秋

夫木集

同

は川花のひとはあすりの旅衣露けた物はあ
やきの、原

同

宮城野の野守か庵に擣衣萩の花すり露や
みらん

新後拾遺秋下

前參議忠定

宮城野の露分衣あはさては忘れたえの萩
の花すり

新拾遺旅

有家朝臣

さくら色に春立を先を旅衣にふみやれの
はきり花より

同秋

法印隆淵

宮城野の露わけ來つる袖よりも心ようつる
萩の花すり

安達原白真弓

相傳斯地往古出良弓而或備朝貢或用兵家且
夫和歌者流往々詠之托物比興之情可視於實
方之歌則實見寄贈此物也但今不聞制之者焉
尤可惜剩郷俗絶無說其事實者可謂遺恨也一

説曰古來稱之者非良弓之義原上有白檀樹枯
橋已久如今化為石猶存焉云且古人直爲樹而
讀來者亦多故末篇舉以備參考云

大歌所御歌

古今

みちのを乃あさちのまゆみ我むかはを
へよりこと志のひくあ

小一條右大將あま川尻給ふせてよ見てそ
へて侍りたる

後拾遺

源重之

陸奥此あさちの真弓むくやとて君に我身を
まのせつる哉

りぬら飛ゆる人のもとよさちの國より弓
をほりはれとてよと侍ゆる

藤原實方朝臣

陸奥の安達の真弓君にこそたれもひよめある
事もかたはえ

寶治百首歌奉りける時寄弓戀

續後拾遺戀 後深草院辨内侍

みちのを此所たちの真弓末終よあらぬか

よもひを心か那

風雅

三條院藏人左近

是やあの安達の真弓今おそはれもむよめた
るおともりたらえ

光明峯寺入道前攝政家十首の歌合ふ

新拾遺

後堀河院式部卿典侍

人己いさあたちのまゆみ押返え心の末をい
りよこのまむ

我になひを契かりとて頼まきとあたちの真
中國入道前太政大臣

弓あふ心と

法印守遍

如ひあふやはや七十にみちのく乃あたふの
ま弓はるよ逢と

藻壁門院但馬

今もさゝ安達は真弓引手にもはるこゝろ
れ何とそとあるゝ

最勝四天王院名所御障子阿立原

從三位家隆

獵人の安達の真弓末ぬはみよるや小鹿の秋

のせそふく

よみ人あはれ

みちのを乃安達は原の白まゆみ心こわをも
とゆるれみる那

家隆

名所百首

ものゝ夫れ何さちの原の白まゆと引手もや
すを暮る歳りか

按法印守遍及二首雖假詞于原上其意趣
乃取弓之義故載于茲云

宇治前太政大臣白河にて見行客といふ事

を

詞花秋

堀河右大臣

關こゆる人にとは、やみちのくれあたちの
まゆみ紅葉あまきや

嘉元百首歌奉りけるとは

續後拾遺秋 贈從三位爲子

名残あき安達の原乃霜枯まゆみちりゆく
頃のおむしき

健保三年名所百首歌

同 正三位家衡卿

あく純行安達比原の白檀あらす木の葉は散
はてぬらん

新撰六帖 光俊朝臣

朝霧のさか引えきはあまのこ檀色はた
ま純さへふる

名所百首 定家

そかたより霞や下よいぢをらむあまのこ檀
春はとありと

順徳院

霜はとさあまのちのまゆえちりはくまのこち

良思馬伎那婆都良波可馬可毛

尾駿駒并真弓

駒一作牧見歌枕名寄

顯昭云みちの冬のとふちのこまは彼國より
出くる小斑のこまを云也後撰にも

逢坂の關の杉村むをほとはをふちにてゆ
る望月の駒

是は杉間の月れりはにうけりてちるをま
たふかるやうに見ゆるあり

奥義抄云をふちのこまとは見ちれをよを
ふちといふ所よりいづる馬をいふ也曾丹

歌に

枕なるをふちのまゆみ見る時をいもう手
りせはいと戀志き

此歌ふてもをふちは所の名とれこへよりあ
ふちの真弓と云かこと志私よ云みちの國に
とふちと云所の名れこへす慥に尋ぬへ志只
馬は何の國にもあれとも陸奥國馬とていふ
と死物あすれはふちの冬にのをふちのこま
とよむよこそ

とちの冬の所たちのこまはあつたとむけ

入達坂のせきまてはきり

是は安達と云所の所れを所たちの駒ともま
ゆみともよむ也それを見ちのく乃以見し
によりに名を聞ゆるあり見ちの國にせ
みちといふ所たにあらはうたりむあま

荒野牧

千五百番駝合

釋阿

見ちの冬のあら野の牧のままたふもとれは
せふまてあれゆを物を

奥牧

拾玉

慈鎮

東路のおくれ牧ある荒馬をあけくるものは
春比若草

夫牧之爲言養也育也飼也畜也周禮所謂校
人掌王馬之政又牧師孟春焚牧地以除陳生
新草卜式所謂牧惡者輒去母令敗群者是也
然我邦俗郡馬自然産于原野之地謂之牧尾
駁荒野奥牧等或安太多良安達槽部之地皆
古昔出馬焉如今生馬之地絶無唯相馬領原
町驛西有間曠之地稱世峯古來産馬仍年々

有驅牧之設聞之鄉俗國守相馬侯隔年閱之以擬觀兵事其制夏五月中旬以申日卜驅馳時皆是所以閱武觀兵之遺法也前日黎明巨家高族服半臂帶兵器而進備槍弓銃而步兵尺隊行前驅此時國守整行出于原町驛家臣扈從各立旗旄建器械就營而宿至申刻而國守出於驛亭巡閱定原上之屯營然後還旅館明日爽昧家臣戎衣各停馬群乎營中而待國守出駕早旦國守經行復閱於營地於是放並銃先是措假屋于世峯設帷幕于山椒構國守

憩息地仍國守率諸卒而入於此然後脫兜鍪解鎖手是乃欲單身而捷行也豫立旗設表自山下至海濱各隔一步列卒圍繞而衛之自是諸士擊鉦鳴鼓皆有節制而入于林藪分合進退各驅牧馬於曠野追隊隨行漸次集莖于妙見社前明日早旦各朝服閱之捕馬者六七十人揚鯨波而追之其式各有差是古例之大略也唯牧馬之遺事其存者此一舉而已

雙背蛤

事見宇太郡

よみ人志少以

みちの冬フユの宇太のおはまのうたせり何は
せてみはや伊勢のほま白

鷲翹シノシ

當國之佳品也多出于松前者為上品

深山の鷲

藻盤草

よみ人しあす

と此ふやまこさはのれをこかふわあその
羽はうりや人おえらるゝ
跡みへてけりふに乃こるゆをむにそをやな
るこえの人をあもある

いてはあるむらりのみさう立如へりおやの
と先にはわあもどるあり

此歌の心はむらあ出羽の平賀より逸物あ
りどく鷹を帝へまいらす此鷹はあきて常
に八幡ハチマタへまいりて鳩のいくらもある中に
ましりてつきあるけけり後にそ鳩も鷹と
つれく字せよなり其後日數へて此鷹内裏
へ参りさり通身に血はれさり其後月をへ
て出羽より註進あはるは先年内裏へまい
らせさりと鷹巢たろあ鷹ありあう子を

取て後其母わをいをはきとりあり今年の
頃此鷹鳩をばき了出來り此母とりし鷹は
栖山に入て鳩と相共に此鷹の鷹とくる
おろちて失とりを申すそのとちいく程も
かを鳩もやはたへりけり此鷹をば
後鳩屋と名付けさせ給むて鷹飼にあはれ
させ給けるありといへり

安方鳥 ヤスカタ 方或瀉字或号善知鳥

相傳是所産于外濱也近來春夏之交商賈賣之
其大似小鳧而通形淡黑長首尖嘴々脚共黄色

但自額下至下腹純白商人曰之善知鳥食之則
有脂甚美其好味不減絲頭鴨此鳥實不審其偽
焉然以歌謠所述之趣而考之則其肉足以供鼎
實其味足以養脾胃故業之者亦貪多務得而至
專害生致殺如此之酷與識者詳焉
此の瀆

藻盤草

よみ人志らば

子とれもよみよみよみ雨の笠のうへよみよみ
よむよみよむよむよむの鳥

大神宮へ勅使下りてうとよむすうと云

鳥を取て三角柏と云樋は備て神供に奉る
と也此鳥取者は篋笠をきてとるあり花の
ゆへは砂の中に子を生てりへあさるを母
鳥の字とふり真似を志てうとふうとふと
よへはやまのさといひてはむ出るを取と
也其時母空ありあさこあさへは死てある
死て鳴泪れ雨れこそを血あで降るあは
さ花の涙りりて身抱んまるゆへにこれ
りさを死るせいふ

陸奥紙

是乃當國所出檀紙古往稱之陸奥紙也今俗曰
之引合者是也

源氏末摘花にまき乃をふ紙のあつあへたる
ふよ母むはりはふかうふめ給へりいとよ
う如死おほせたり歌よ

り衣君の心の川衣け紙はたもとほかく
花そほち川よのみ

又玉りつら御文にはいとり字は志死みま
の冬にらみのはあ志と志へあは死り黄はみ
たるにいてやたそへるはあうくおこそ

死て見ればうらみ衣返しや
りて袖をぬえして
又胡蝶にさす如きたやうりたる御ことはも
いとよきと見給ひて御返りこと聞へさ
んも人先あやとれはふよなる陸れく
お紙にたゞ字けたまはりぬみたりよ地
のそく侍りたまは聞へさせぬとのあ
又橋姫よりへり給ひてまつ此ふをるを見給
へはりおの浮線綾をぬひて上といふ文字を
字いふうきたりほおれをみて口のうたを

結するは彼御名の封はありあまもた
る志字覺へ給色々の紙にてたまさうお通へ
る御文乃返事いつとむれそ有さておの御
手よて病ひはおもるたりにありあさるに
まよほのふに死こゆる事うたぐありぬる
をゆり忘る思ふ事はおひよとり御おちも
かはりておはしまらんうさまくうな
きことをみちのをお紙五六枚よりふくと
あやとれ鳥のあと乃ようお死て
先のまへに此世をそむる君よりも余所お

別る玉を悲し死

又寄生に一目の御事はあさりの海へ入り
 志に冬を去る聞侍りに死御心のあこりなる
 らまをうはいのにいとれ去くとれもひ給へ
 るるよにもれろ如かぬその身あむさりぬ
 くはみ味可ぬもと死おへ給をり陸の冬に紙
 あひ死も川をろはにまめたきてのき給へる
 もいとれ如かけあり
 宇治拾遺物語お水干のあやあけありける
 母ころひたぬたると死りあけの字へよりな

とこ志て高や如ふこれろ不ころひぬいてれ
 こせよといひれれと母ともなくあは返る
 りはれは物ぬとせ事さすときくろはにとく
 ぬいてをこせたる女人のなとあはゝ如なる
 こ急きて不先てとり見るにほころひはぬ
 はてみちのく紙の文をそのほころひにも
 あむすひつとてあけ返るりなり何やと
 れもひ了ひるて見ればるを書り
 これる身は竹のそやににあぬともさ
 ろころもどぬきりへるり那

世繼物語にたゞ、北の方車に比せ給ひ之程に下かさねのゑりせりて御車に入らうように平仲よりてのさしめられたるにつけてさりおたりたゞ、そ見給はに成おたり北のりさ又見けらに袖の下にちれを紙せひきやり了とせりしるをあやとおもひて見れば忍ふる人の手にて

物をこそいはねれ松の岩は、といはねはこそあはれ戀しき物を

となん有ける事し乗る程下りさねれゑり入

き、は是にあら有けれとたふなる

三代實錄清和紀貞觀十五年十二月廿三日甲寅正五位下陸奥守安倍朝臣貞行起請三事其

一事曰爵祿之興爲優功績然則授叙之事當必其人而比年國司不依勞効任意授爵由是預祿

者衆調物減耗所司勘出歷代不絶望請夷俘位階每年立叙法選有功之職隨年々死之闕叙補

二十人已下太政官處分依請其二事曰國中政莫重收納然則分配之吏可勸其事而任用之

官未必其人或被誘郡司稅帳納藁爲稻或見賂

富饒曾豪以虛爲實須據旨必科其罪而備偏貧
俸斷不畏有罪望請爲致虛納欠損國司之公廩
先補所欠然後科責若欠物巨多公廩數少長官
已下相共慎納
延喜式廿二民部上曰陸奧出羽兩國便納當國
凡朝集使終事還國者令二寮勘合官舍溝池桑
漆種麥陸田鷄補設等帳然後移送式部省
凡陸奧出羽兩國朝集使雖濟朝集政無調返抄
者不移式部省
凡諸國健兒皆免徭役畿內用桑田地子餘以國

營健兒田充之出羽國出業給之

仕丁名簿先附大帳使進省但志摩飛驒陸奧出

羽佐渡隱岐長門太宰管內並不在點限

凡出羽國放生田一町割乘田永充之

凡文章博士職田五町算博士四町

凡陸奧鎮守太宰等國府掌各二人每人給職田

二町

民部下凡計帳者陸奧出羽兩國太宰府九月卅

日以前申送餘國如定往古置義倉見于此

凡義倉及官田地子等帳並附正稅帳使

年料別貢雜物 陸奧國筆一百管 零羊角四具 出羽國零羊角十具 交易雜物 陸奧國鹿革 鹿皮 獨犴皮數隨得 砂金三百五十兩 昆布六百斤 細昆布一千斤 出羽國熊皮廿張 鹿革 鹿皮 獨犴皮數隨時

同廿四主計上日凡諸國輸庸輪二分調之一

陸奧國行程上五日調布二十三端自餘輸狹布米

布米穀庸廣布十端自餘輸狹布米

出羽國行程上四十七日海路二十日調庸輪狹布米

穀以此二條當往時知行程之日
同廿五主計下凡勘大帳者皆據去年帳勘其書入

同廿六主稅上凡勘稅帳者先據去年帳勘合今年帳凡勘和帳者皆據當年帳即通計國內十分以得七分已上為定若有不堪佃者聽除十分之一

陸奧國正稅六十萬三千束 公廩八十萬三千七百十五束

國司料六十四石一千貳百束 鎮守料十六

萬二千五百十五束 祭盥竈神料一萬束
學生料四千束 救急料十三萬束
出羽國正稅廿萬束 公麻卅四萬束
月山大物忌神祭料二千束 健兒糧料五萬
八千四百十二束 修理官舍料萬束 池溝
料三萬束 救急料八萬束 國學生食料二
千束

按延喜式記往時稅法貢料等如此仍知有
祭祀料學生料救急料足食料之制也皆是
崇神養人備國用利農業厚恤民專教育之

急務也於是欲特表之教後人知往時有此
善政焉下倣此

凡按察使及記事季祿衣服廨下衣服以陸奧國
正稅交易充之不遙授之人 凡諸國司贖物以正
稅給之 凡陸奧國兵士間食料米二千八百八
十斛八人別日 割年中所輸租穀內每年充之
凡陸奧國七團軍穀主帳川五人糧米准太宰府
統領以正稅給之

祿物價法

陸奧國絹百六十束 綿十三束 絲十五束

庸布卅束 鐵十四束 調布五十束
 出羽國絹百五十束 綿十五束 絲十五束
 調布五十束 庸布卅束 鐵十四束
 驛馬貢法
 陸奧國上馬六百束 中馬五百束 下馬三百束
 信濃出羽二國上馬五百束 中馬四百束 下馬三百束
 驛馬死損
 出羽等五十國十分許損二分

陸奧等十四國十分許損一分
 諸國運漕雜物功賃
 陸奧國二百十束出羽國百卅一束
 凡一駄荷率絹七十匹絕五十匹糸三百約綿三百屯調布卅端庸布卅段商布五十段銅一百斤鐵卅廷鉄七十口
 同廿八兵部省陸奧出羽等十七國郡司書生等並聽帶仗
 諸國健兒
 陸奧國三百二十四人 出羽國一百人

凡鎮兵陸奧國五百人 出羽國六百五十人
諸國器仗

陸奧國甲六領橫刀二十口弓六十張征失六十
具胡籙六十具右每年所造具依前件其樣仗者
色別一々附朝集使進之

諸國驛傳馬

陸奧國驛馬 雄野 松田 磐瀨 葦屋 安

達 湯田 岑越 伊達 蔦借 柴田 小野

各十四 名取 玉前 栖屋 黑川 色麻

玉造 栗原 磐井 白鳥 膽澤 磐基各五

匹 長有 高野各二匹 傳馬 白河 安積

信夫 刈田 柴田 宮城郡各五匹

出羽國驛馬 最上十五匹 村山 野後各十

匹 蚶方 由理各十二匹 白谷七匹 飽海

秋田各十四 傳馬 最上五匹 野後三匹

船五隻 由理六匹 避翼一匹 船六隻 白

谷三四 船五隻

同卅一宮內省凡踐祚大嘗會夜輔二人於廻立
殿下候之天皇御悠紀主基殿各分左右膝行且
鋪御前道葉薦還御廻立殿亦如此

諸國例貢御贄陸奧昆布 縹昆布
同卅三大膳下諸國貢進菓子出羽國甘葛煎二
斗 甘葛煎直藏人所
同卅七典藥寮 諸國進年料雜藥
陸奧國六種 甘草十斤 秦膠四十斤 大黃
百廿斤 石斛八十斤 人參四十五斤 附子
百廿斤 猪脂二斗
出羽國二種 甘草五斤 羚羊角四十具
同卅九內膳司年料陸奧國 索昆布四十二斤
調細昆布百二十斤 廣昆布三十斤

土產類下

上篇迺以出古書舊記者而舉之爲證焉下篇
迺以當時所用之土物分數而記之其他有未
悉及聞見者則闕而不載焉將來須聚之以漸
矣視者詳之

貨財

夫貨財之於天下也一日亦不可無之至寶也
且夫我神州之出黃金也始開其氣於此國古
之小田郡陸奧山山今並之亦稱金華山其地幸在于
封內爾來其華盛于天下其澤及于後世白銀

赤銅之類亦相尋而興于封疆山谷焉是豈非
天寶之物華萃於我國乎故略舉其地以記神
秀之異于他邦也

伊澤郡津山金山 栗原郡細倉山 銀山 玉造郡

尿前銅山 加美郡檜澤 銀山 刈田郡關山 銀山

同郡雙森 玉造郡熊澤 兩地共銅山 刈田郡黑

森 銀山 其他往古生于黃金白銀銅鐵鉛錫者多

衣服

筋紬 出于伊具郡金山邑以五綵縷而為縱橫經
緯俗謂之島紬其好品者直尤貴贈他邦以寄投

焉人謂之仙臺紬以賞之

紙絹 出于刈田郡白石城邑倉本村尤為上品以

柿汁染紙繼而揉之俗謂之紙絹用之服以能避

寒尤足以防風其淡赤色或淡紫色近代有染而

成文者又所出于相馬其制堅強以克堪多年而

賞之擔株

紙布 是亦白石之產也其制縷紙而織之綿密如

練縐其精白者如絹素是亦摺紳之徒侯伯之族

尤所賞用也

馬鞞 出于本吉郡千麻驛驛婦摠以織之而為業

焉十歲已上之小女織之尤巧其具也立一技木于盤上繫其細索于枝上梭小竹針而左右縫之如織之翕須臾成一鞞是亦或獻幕下或贈之侯伯染而用之

飲食

糗糒 出于仙臺治府市店純粹精白者非他邦之制所及也其麤者爲上細者爲次如粉者爲下世謂之仙臺糒上自王公下至士庶甚賞之故年年我太守以土用之節而獻之將軍家及公卿且贈侯伯士大夫賜市人等

秬稻

糯米

封內俱多嘉禾上品者

糖圓

出于宮城郡松島海濱饗家以此爲業擷釜次之兩地經過遊歷之客必齎之以還家包之以竹皮但近年味稍惡所以其制踈而貪利亦多也

薄脫

是亦所出松島絕品也以秬粉而爲餌和豆粉而爲團推之如麵其薄如紙經已七寸餘其色青黃味亦甘美他所做之不成

火米

以速稻熬而舂之志田郡米倉村邑出之尤魁于他村已可三旬乃薦之於一宮及宗廟而告

新穀之成然後頒之

雲麵 乾饅飀 雲麵出于刈田郡白石乾饅飀出

于南部及仙臺城市

謝東奧友人遺白石雲麵物茂卿

誰探王女洗頭盆中有千絲白髮存不知仙人憂

底事將憂相送到護園

禽獸

華蟲 以所出于玉造郡為佳品其味殊于他此郡

中田野闕土地肥故啄紅稻及雜穀而肉厚肌膏

是以滋味大異于他所

鸚鵡鴻鵠鳧鴨 所獲于封內郡縣村邑者尤多

駁馬 封內之產尤多且畜養馴致調良而鬻市者

年々聚之栗原郡岩崎驛司廐者擇其善良駿足

者以季冬而獻之將軍家南部領主亦愈

封熊豪豬麋鹿羚羊獺猴走兔豺狼亦多或用其肉

或用其皮或用其膽或用其毛以充其用

魚蝦

鯨鯢 設巨船其制如繫小繩于尖刀而投之魚身

刺焉俗謂之設利殺漁人有遇游鯢之浮于碧海

則率徒眾而向其地以尖刀而投擊者數百繩遂

澄之後斷其魚肉而運送之江濱熬煎之以為膏
膏之則其利巨萬一鄉一邑依此而致富

鮭魚 其佳品大異于他邦杜鹿郡石卷及橫川本
吉郡葦澤膽澤郡衣河名取郡名取川巨理郡逢
隈河等水濱各出之其中有子籠鹽引濱涵鮭
鮭鯊等多品其制見于下

腹鮭 乾鹽鮭 濱涵鮭 割鹽鮭 鯊鮭

以鮭魚而涵鹽汁蘊魚子于腹而乾之者俗謂子
籠無子者曰鹽引涵之久而濕者曰濱涵割之涵
鹽乾之者曰割鮭和鹽而置飯中者曰之鮭字書

所謂以鹽米釀魚為菹熟而食之者是也腹鮭
乾鹽鮭之制石卷橫川為上品濱涵葦澤為佳割
鮭衣川為佳各因地而其制有巧拙其味有好惡
年々寄之江都京雒而獻于大樹博陸贈楮紳侯伯
年魚 名取郡人來田設魚梁或網之而捕焉其大
者尺餘其地乃兩區白石氣仙及衣川南部和我
共出嘉魚或膾之或炙之以為盛饌具或乾之或
鮮之而為嘉賓貯又以其魚腸為醢者曰之鮭此
俗所用不出以其魚子盛腹者曰之子籠
于字書焉 其狀與比目魚少異也出於石卷川孟秋漁

人又之于水底而取之或膾之或炙之以用之其味殆不可勝言但經宿久則易魚餒而肉敗也故不堪遠之他方尤可惜

鱈魚

不見字書乃俗字

自春夏之交至初冬未得之捕及

中冬而初獲之以出于前濱為嘉近郊外水濱俗

外者謂氣仙海濱遠島浦上所出為次魚腹有奇

腸其狀淺白若墨雲凝雪俗謂之雲腸或又謂之

菊花腸其解明疊裝如菊花相重也以捕之始而

獻之大樹焉或涵鹽乾之包之以葦者俗謂之贊

卷鱈其新鮮者風味非他邦之所及也

金海鼠 其狀似海鼠而稍圓也裏面有腸其色濃

黃似雞卵子仍謂之金海鼠以出于金華山下海

底清為佳焉相傳是金氣之所化也邦內他海畔

無此物也故土人誇之乾者乃以為遠方嘉贖

王餘魚 所謂鱧魚也出于氣仙者為上品其味勝

于他濱其品類有青眼石鱧赤鱧鴈翼黃鱧紫鱧

各以其形狀名之鴈翼已下為下青眼無毒其他

因病而忌之青眼赤鱧自二月至四月而味甚美

石鱧自十月孕而至中冬其味不可勝言和其子

而謂之國俗謂之子膾而為珍羞焉殆可愛

並眼 國俗土人謂之扉板以其形廣平而似戶扉稱之以鄙名但與江都所用大同小異也季夏之際多捕之然國俗以其魚多其價廉而賤之不上貴族饌焉且有毒故富息幼子孕婦金創多病者鱸魚 至季夏土用節膏腴殊矣諺曰鱸魚之於口腹當季夏之時也嘗所觸之石亦宜以養脾胃矣張翰松江之事亦可儆考

平魚 世所謂鱮魚也自初夏至中夏捕之甚多仍價亦廉也往時秋冬得之尤多近年老釣者自紀州來教於是邦內漁者四時釣之不息盛饌之珍

羞不待夏日然其佳味以初夏以後為上品

鮪魚 其大者一丈餘或七八尺俗呼之為五駄負荷之以用五馬也或分之以割五段也其小者三四尺以其短少者為上品先是自季春結網于海底數十里其設也立四柱於海上可據之地以巨石繫其柱礎而構望樓于四柱頭令老漁坐於樓上而窺隊魚之入網裏四面皆布魚網而待魚之輻輳暮春或初夏從南風而滿網口樓上人臨視其魚隊之多而呼之告于江村漁家於是群漁催漁舫數十艇棹之機巧關其網口舟行逐之時大

魚活々潑々漁者以魚叉而登之舟中乃取之先
削其魚鼻以食之是捕鮪者古意也此魚也曾惡
暑故過時經宿則必傷人

章魚 文字或作蛸或釣之或網之其大者四尺餘
秋冬出之市與江都所鬻少異大同

鯧魚 俗訓之賀登其貌似鱈魚而幾尺季冬孟春
取之甚有膏而美

金鯽 所出于志田郡大崎沼自古爲佳品其長充
尺其沼水涸而爲田野不出此魚尤可惜但品井
沼蕪栗沼廣淵沼大湖皆生鱈魚

石決明 俗所謂鮑也其摺者曰卜貝或有丸乾串

貝熨斗等皆以氣仙所出而爲佳品特唐爾海濱
尤好以腸而和載者謂之鮑醃

鰻魚 河海所出多以產河水而爲上品以名取郡
井戶濱而爲佳焉

鯉魚 盛夏釣之其味甚美乾而束脩焉氣仙所出
者爲上品作醃亦佳也

海栗 稱之宇爾是亦氣仙爲佳

海鼠腸 出于氣仙分濱者爲佳乃聚海鼠之腸以
作之微少不易作之故佳客酒徒以爲珍羞

牡蠣 牡鹿郡渡波宮城郡寶羽島巨理郡鳥海等

其地而大如白柿季冬春初甚肥大

白魚 所出于宮城郡井戶濱尤佳也牡鹿郡石卷

中秋漁者網鮭魚此魚屬網下而至者不知幾千

萬數江童川見以鱸布而取之

海苦瓜 無處而不佳是亦他方海中尤少

鯢魚 鯢子 俱是出于松前者鯢魚俗訓之似身

乾鯢也鯢子乃其子也

焦石鯨 是乃所出于蝦夷是亦名產也

菜蔬

蕎麥 二迫文字村東山鬼首篠谷湯原等山谷之

間尤為上品

茄子 以廣瀨川以南為佳其所出早於他所其形

質與武州江城所產異也

熟瓜 以名取郡北日村所產為佳品有白瓜謂之

梵天其俗曰幣帛而稱梵天取瓜亦愈或有青碧而黃筋者

謂之筋好瓜近年以他邦種植之往時有名護屋

種爾後有淺碧瓜近歲用伊具郡佐倉種其色青

黑而有綠筋細點者其味有破霜嚼冰之美曰之

幾都又有黃色青筋而短小者謂之珠鉤尤好瓜

也人以爲其種子自尾州來然考之夫木集則府
中古之好瓜名仍舉其事實于此以證焉

夫木集夏部

讀人志

山城のとはよりよむて見て志のありけり
りける人のありけり

此歌に大君家集大監物なりける時内侍の
をけにみり申ふ大舍人むけくまふ
ある人内侍のをけたるや字ありて
にありけるをさといありけきはまへ
りけるふちふとい瓜を黄ある紙は

とて大舍人といふ翁にこれ奉まるとい
せよりけははくさのさにははくそこよ
りをりけると云々

松露 城外以東海濱松根必多此物又所出于宮
城郡松森地尤爲佳

牛房 所出于宮城郡袋原尤長大
菜服 俗所謂大根也是亦産同村者爲佳松森所
出亦可

薇蕨 所生于玉造郡大口村田切邑尤佳其長三
尺其莖如矢

蕨粉 所出于伊澤郡鬼首村尤好

芋子 俗謂之鄉芋宮城郡多湖村所出為上品比

之他鄉則其味大異而其美殆差別也

薯蕷 俗謂之山薯以出于名取郡為佳

椎茸 以氣仙郡所出為佳牡鹿郡加美郡亦出之

海苔 以氣仙所出為嘉品

黃精 以南部所出而賞之

柿實 有多品名取郡多出之特中田驛畔頗佳自

城下北地不宜柿樹故以南方地出好柿

林檎 宮城郡松島地所出尤佳品其子圓大始甚

青黃染來以臘脂為其味甘美與他方大殊

梨子 城北地宜于梨實尤有多品名松尾醍醐初

雪者為嘉品炭燒龜子次之

器用

引合 芳章 共膽澤郡東山刈田郡白石兩地所

出其制與越前好紙精好不相減古人所謂陸奧

紙是也仍稱壇紙乃引合是也芳章之制白色外

有五綵色其風流雅趣足以用書翰詩箋之料也

是以他邦好事之人欲之者多

摺原 是亦出于同地多品其中亦有施五采而淡

色者且有設文理者稱之文楮原其亦與尋常異
不許市人賣買是亦足以用會紙詩箋矣尤雅騷
之具也又有濃藍布玉者其美艷更絕妙
料紙是乃所用平生書通有大小俗謂之寄紙蓋
以寄呈友生而述其情實也有上下中三品贈澤
郡東山刈田郡白石伊具郡丸森地出之
鼻紙俗間畜懷中而具津液唾涕之用者謂之鼻
紙又有同名而具國主之用者其制似料紙而精
好與和州芳野所出同其雅物而非野州宇都宮
常州水戶產之所及也名取郡茂庭村所出爲上

品同郡柳生亞之又有稱封紙者是乃具通信封
緘之用又有稱白石鼻紙者出于刈田白石甚足
資用昔疊紙也

筵席俗謂之疊乃居家之席也是亦有多品名取
郡所出以中繼者爲上焉稍似備後之制是乃筵
者栗原郡三迫所出爲中品贈澤郡東山所出爲
下品然久用而不敗又有入間田筵又有菱筵織
之以染茅而經緯其黑白雜之以紅紫而爲其華
紋或有嘉賓上客則所以易瓊筵擬綺席而饗之
也

埋木灰 燒沉木而為香爐灰也其色赤黑名取川

為名品此河流常假水勢而下之薪木而備資用

其重者或沉水底而歷年也久土人取而燒之則

其氣尤淡是以能貯火而不滅故賞翫殊甚在他

邦亦公伯之徒及士大夫之族得而珍之

牙刷木 刈田郡湯原村所出為佳壯鹿郡笈入村

為次

石硯 桃生郡雄勝濱所出為上其色淡黑堅剛能

磨墨但以出海底而值盛夏則墨亦易腐桃生郡

小船越所出為次其石色紫而尤佳也

土器 其制尤多其器肥滑澤者為上品俗謂之肌

滑土器用獻盃之具也

飯器 會津所出多品又江刺郡所出謂之正法寺

椀朱內漆外或畫鸚鵡或蒔花草飾之以金箔其

朱色煒燁好事者為茶享之飯器其雅物可愛然

如今省古制與往年大異

蠟燭 會津所出其絕品冠于他邦

漆木 以所出于同地而為佳

水晶 是乃非水晶寶石英者也出于南部封內及

氣仙郡刈田郡此地所出紫石英尤為佳品

紅花 是乃臘脂也特以下所產于羽州最上郡者為上品

紫草 以所出于秋田而為佳分散之他邦而鬻之

染工

藍草 所出之地最多是亦分之屬于染工

苧草 以出于秋田地而為佳

材木 南部為上又氣仙郡有檜山金花山中多規

樹其木理皆成墨雲聯璧之象俗謂之玉木理

笠笠 栗原郡澤邊驛以此為業焉其制冠于多方

然如今以貪利而失古制略其機巧

補遺

黃鷹 或網之或覆巢而捕之其他亦多氣仙郡檜山所產鷹兒特好

鷓鴣 捕于牡鹿郡遠島者謂之島兒捕于栗原郡宮澤者謂之川兒

胡獐 温臍臍 俱出于松前

海獺 出于氣仙郡海島

水豹皮 出于松前地

孟子曰諸侯之寶三土地人民政事寶珠玉者殃必及身夫人君之於身也位在崇高而專安

富尊榮焉居則有大廈高樓出則有車馬旗旄窮無數之富麗極無量之娛樂是以其平居也肥甘足於口輕煖足於體采色足於目聲音足聽於耳便嬖足使令於前諸臣皆足以供之菽粟布帛奉于身體者也鳥獸魚鼈養于脾胃者也果蔬茶蔬資于口腹者也其他供給之周資具之多俱是日用之不可欠者也且夫言其極則皆所以生于山出于海成于土者取而不盡用而不竭其本也總之造化之功用天地之嘉况也然有之於己而輻輳于一身者人中之

天幸不可不慎焉是以大學傳有言曰君子慎于德有德此有人有人此有土有土此有財有財此有用德者本也財者末也外本內財爭民施奪又曰生財有大道生之者衆食之者寡爲之者疾用之者舒則財恒足又謂長國家務財用者必自小人魯齋許氏曰地力之生生物有大數人力之成物有大限取之有度用之有節則常足取之無度用之無節則常不足生物之豐歉由天用物之多少由人又曰天地之間爲物皆有限分限之外不可過求亦不得過用暴

珍_ハ天物_ヲ得_ト罪_ヲ於_テ天_ニ此數說_ハ是乃天地自然之理
財成輔相之極致而全_ニ天賦_ノ之術大學所述_レ之
外更_ニ無_ニ餘法_一也後世不知_レ有_ニ此理_一唯務_ニ便利_一而
專_ニ措_ク遂_ニ戾_ニ天理_一而賊_レ人主之德_一者古今幾多
哉自_レ是視_レ之_ヲ則土地之於_ニ財用_一凡主國之君庶
幾_ハ平日恐懼修省_一而不可_レ不_レ重_キ焉

